苦の後

永代美知代

上

うらゝかな日曜の日のお午すぎです。朝から奇麗に晴れて、うす紫にすこしくかすんだ空には、風一つ吹かず、梅日和と云ふのですか、桃日和といふのですか、三月中旬の、のどやかなお太陽樣は、部屋一杯に差し込んで、愛さんのお机の前あたり、かげろふが眼立ってもえました。

愛さんはうっとりした氣持ちになって、お机の前に座ったまゝ、何を見るでもなく、考へるでもなく、一枚だけ明け放した障子の彼方のお庭で、駒鳥だの鶯だのが、しっきりなしに囀り交す、その美しい上手な音色に聞き入って居りました、

縁側に香箱をつくって、糸よりももっと細っこい眠さうな眼を、ちょい〳〵明けては、愛さんの樣子を、そっと見い〳〵、居眠りをして居た玉やが、急に兩耳をピョコつかせて、驚ろいたやうに何處へか駈出したと思ふと、淺黄っぽい矢飛白の綿入れに、紫紺の袴をはいた美しい色どりの人が、クリームの蝙蝠傘をすぼめて、飛石の上にニッコリ突立ちました。

『アラ百合さん！』

愛さんは直ぐに起って、百合さんの手を引張るやうにして、上へあげようとするのでしたが、百合さんはいつも、逃って、何故か其手を振さるやうにして、縁側に腰をかけ、

『有り難う、だけどもね、私今日は上ってられないのよ。』

『まあ何故？好いぢゃ　ないの、私何だか今日

あたりあなたが訪ねてらっしゃるやうな氣がして、御馳走をして下さいって朝から母さんにお願ひして置いたの、だからゆっくり遊んで行って頂戴よ、ねえおはぎなの、御一緒に頂きませう。』

『えゝ、だけども全くさうしてられないんですもの、實はねえ、私愛さんに折入ってお願ひがあって上ったんだわ、聞いて下さること？』

『まあさう、折入って私にお願ひって、一體何なの？大變心配な事？』

ふだんから人一倍氣だてのやさしい愛さんは、もう顏色を變へて心配するのでした。

『アラ御免なさい、私の云ひ方が大げさなもんだから、飛んでもない氣をもませて濟まなかったわ、あのね、それはね、あなたこれから遠山さんを見舞ってあげて呉れないこと？』

『え？遠山さんて？誰なの？』

『ホ、、、御免なさい、私今日は餘程氣がせか〳〵してると見えるのね――アノソラ、私共のクラスに、遠山悅子さんて方があったでせう、年中一人ポッチで、隅っこにばっかり居て、誰とも親しくお話一つしない方、あの遠山さんがねえ、二三日前から御病氣で、寮病院へ入ってらっしゃるのよ。』

『まあさう、甚くお惡いの？』

『えゝ、若しかしたらよくならないかも知れない位よ。それだのに皆さんてば隨分なのよ、初めのうちはね、それでも同室の方なんか、お義理でもってちょい〳〵見舞ってらしったけども、遠山さんが變人で、クラスでも彼の通り評判がよくない方でせう、だもんだから、意地惡のヒネクレっ兒でいけないの、憎らしいのって、皆さんでいやがって、室長の方までが、些少も顏出しも

してあげなくなったんですって。』

『まあねえ、それぢゃ彼の方、寐てゝどんなにか心細いでせうねえ。』

『だから私可哀相になっちゃって、……あなたなんぞ東京にお家があるから何ですけれど、旅で病氣すると本當に心細いものよ、ですからねえ愛さん、あなたも遠山さんを見舞ってあげて頂戴な。』

百合さんが自分のことかなんぞのやうに、たのむ熱心な同情にひかされて、愛さんは自分も一緒に見舞ってあげようといふ氣になりました。

『好いわ、それぢゃ御一緒に出掛けてよ。』

『まあ嬉れしい、有り難うよ、全く有り難うよ。』

百合さんはいきなり愛さんの手を執って、痛い程握りしめました。

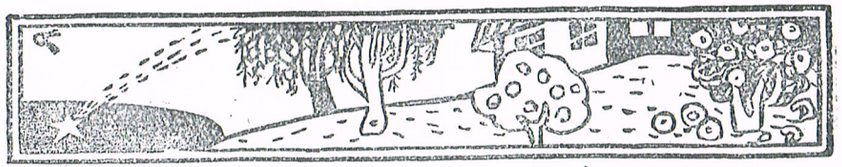
『ホ、、、痛いわよう、其代り私、今日は只あなたについて行くだけよ、だって私、遠山さんって方、どんな方だか些少も知らないんですもの。』

『アラそれぢゃ困るわ、私今日ねえ、故郷のお友達で、今度初めて東京へ出て來る方があって是非新橋へ出迎へに行かなきゃならないんですもの、だからあなた遠山さんを見舞って、私の代はりに暫く居てあげて頂戴な。』

百合さんの眼には涙が一杯含まれて居ます。愛さんは何だか甚く不親切な、惡い事をしたやうな恥かしい氣がして、思はず耳根のところまで赤く染めました。

『さう、それぢゃ私出來るだけうまく慰めてよ。寮病院の何號』

『いゝえ、あなたが承知さへして下されば、私も一緒に病院まで行って、遠山さんにも一寸逢って行くわ。あなた直ぐお支度して



頂戴な。』

『えゝ、一寸母さんに斷って來てよ。』

やがて間もなく、愛さんは百合さんとお揃ひの矢飛白に着代へて、出て來ました。二人は姉妹のやうに睦しく話し合って、ポカポカと暖い春のちまたを、不幸な友達をなぐさめにと急ぎました。

中

『此室なのよ、一寸待ってゝ頂戴。』

つと立ち止まると、愛さん一人を藥臭い陰氣な廊下に待たせて置いて、百合さんはとある室の戸を開けて行きました。

愛さんは十分ばかりも薄暗い廊下の冷い壁にもたれた儘、一人ポッチで立たされて、何だか斯うしんみりして了ひましたが、百合さんによばれて、恐々室内へ入って見ますと、つき當りの窓の下に据えられた寐臺の上の、眞白な枕に頭を埋めたやうな風にして、遠山さんは仰向きに臥て居ました。

『お苦しいこと？』

百合さんがやさしく聲を掛けましても、遠山さんは別に返事もしません。だが眠って居るのでないことは、なやましげに顔をしかめた樣子でも解ります。

『私今日他へ廻る用事が出來ましたから、其代りに此方に來て頂きましたの、矢張りクラスの方で、通學生で、ソラ柳原愛子さんよ、御存じでせう。』

百合さんはやさしい調子で、斯う話しながらも、遠山さんの蒼ざめた額に亂れかゝった髪をかきあげ〳〵してあげるので、

『まあ無理に見舞って頂かなくってもよかったんですのに、私そんなに淋しかないの。』

遠山さんは初めて眼を開けて、二人を面倒臭さうに見るのでしたが、直ぐまた眼をつぶ

って了ひました。

『私を嫌なのかしら、來ない方がよかったかも知れない！』

愛さんは何だか馬鹿々々しい氣がして、心の中でこんな事を思ひました。

だが遠山さんの樣子の美しさ。フックリした少女の柔い美しさはありませんけれど、肺病の人なんぞによく見る、頰ささだけホンノリあか味をさした、大理石のやうな蒼白い其顏は、いっそ神々しく、愛さんは聖書を思ひ出さないでは居られませんでした。

『だけどもね、如何してらっしゃるかと思って、私心配で堪らないんですもの。』

百合さんは一向氣にも掛けないらしい風に云って、

『愛さん、それぢゃ、よく慰めてあげてね。』

『好くってよ、大丈夫私怒らないわ。』といった心を眼で答へて見せますと、百合さんは安心して歸って行きました、

五分、十分、十五分たっても遠山さんはじっと眼をつぶったまゝ、口一つきいては呉れません。可哀相に愛さんは手持ち無沙汰に困ってしまって、如何したものかと氣ばかり揉んで居ます。

『ア、ア』

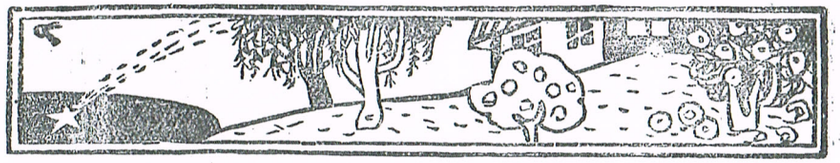
蒼白い艶のない手を組み合すやうにして、遠山さんが心持ち身動きをしたので、愛さんは傍へよって

『如何なすって？甚くお苦しいの？』と訊いて見ました。

『好いんですよ、どうせいつだって苦しいんですから。』

『いけませんのね本當に、何か御本でも讀んでさしあげませうか。』

『御本て聖書でせう、澤山よ、此處の看護婦ってば自分がヤソなもんだから、年中私に



聖書を讀んで聞かすって云ふの、私五月蠅くて、仕方ないわ。』

『まあさう、だけ共私の御本ってのは、少女の友みたいな、面白いおはなしの御本よ。ねえ、何か讀みませうか。』

『澤山よ、私おはなしなんか五月蠅いわ、母樣がちがっていぢめられてる兒のお話を讀むと、何だか自分の事のやうな氣がして……嫌だ〳〵。』

『あなた繼っ兒ていらっしゃるの？』

『否』

『だって母さんの違ったお話は自分の事見たいで嫌だって……』

『本當の母さんて居て、繼っ兒よりも甚いんですもの、どうせ私は憎まれっこに出來てるんだわ。』

『まあそんな……』

愛さんは如何云って好いのか解りません。

『ですからね、私人間が大嫌ひ、母さんも妹もお友達も、あなたも、自分も、ホホホホ、驚いたでせう、だけ共本當の事ですもの、今に死んでくから好い、今暫くの辛抱だ！』

遠山さんは焦々して、しきりに唇をかむのです。

『ねえあなた、そんなに神經を立てないで頂戴、御病氣に障ってよ。』

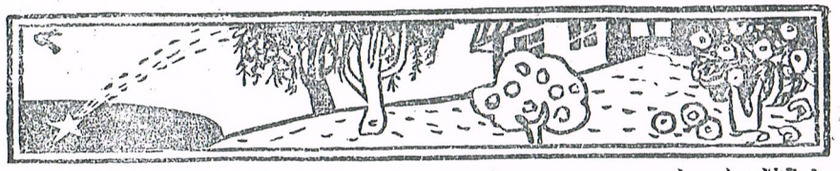
『ウンと熱が出て死んだら、けっく其方が好いのよ、母さんも喜ぶでせうし、お友達ってお見舞に來る世話がなくなって安心だわ。』

『遠山さん。どうぞ氣を靜めて頂戴、後でまた御病氣に障りますから。』

『障ったって好いんですよ。』

『いけませんよう。』

愛さんは堪らなくなって、両手で顔を覆うて、いきなり遠山さんの寢臺の上に打伏しま



した。涙が胸一杯込みあげて來て、愛さんは泣くまいと思っても、つひすゝり泣きの聲がもれて、ぽんのくぼの處をはげしく——波立たせるのでありました。

『あなたそんなに泣かないで下さい、何だか私いぢめたやうで惡いわ。』

遠山さんも流石に氣の毒さうな樣子で、熱にほてった手を愛さんの肩に置きました。

『アラ、甚い熱！』

愛さんが驚いて起って、寢臺の傍の氷嚢を取りかゝると、

『否、この位な熱何でもないの、それよりもね、あなた、先刻から私の云った事、怒らないで頂戴、私焦々して來ると、あんな風な事ばっかり云って、自分でも悲しくなるの、本當に私は何て兒なのでせうね、情けないわ。』

熱にもえた瞳を愈々光らして、遠山さんは最後に熱い涙を止めどもなく流すので、

『惡いわそんなに神經を立てちゃ、ね靜かにおよってらっしゃい、私又來ますから。』

愛さんは餘り長居をして病氣に障ってはいけないと思って、歸り支度にかゝりました。

遠山さんは殘り惜しさうにして居ましたが、默って只唇をかんで、

『あなた屹度怒ったんでせう、又來て下さること？』

『えゝ來ますとも、明日來るわ。』

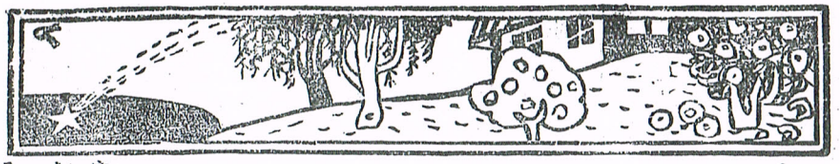
『さう、待ってゝよ。』

『……ぢゃ左樣なら、お大事に』

二人はニッコリ笑ひ合って別れました。

下

次の日愛さんは學校へ行く前に、寮病院へ出掛けて行きましたが、戸の開くのを待ち兼ねたと云った風に、遠山さんはなやましい體



を強て起き上って迎へるのでした。

『待ってたのよ。』

『さう、今日は如何、矢張りお苦しい？』

『熱がとれないんですもの、駄目かも知れないと思って……』

『そんなこと！だけ共お家へしらして誰かに來て頂いた方が好いわ。』

『家へなんかとっくに學校の方から知らせてあるのよ、だけ共駄目、誰も來るもんですか、全く私なんか死んだって生きたって、どうだって好いんだもの。』

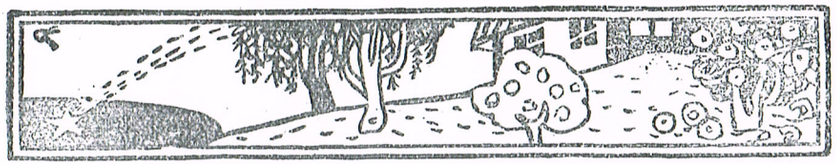
『また！』

『否本當なの、私はねえ愛子さん、實の母さんに憎まれて育ったのよ。』

遠山さんは斯う話し掛けて、さも〳〵堪らなさ相に身を悶え、どんなに愛さんが氣を揉んで、神經を焦立たせないやうに、他の話題をもち出さうとしましても、直ぐまたもとの身の上話に戻して了って、涙のうちに、悲しい事を話し〳〵しました。

遠山さんの亡くなった父樣が、北海道のお役人になって函館の方へ赴任する事に定った時は、まだやっと今の遠山さんは、母さんから乳離れしたばかりの幼兒で、そんな幼い者を寒い寒い雪の北海道へつれて行って、健康を損ってはいけないからと、東海道の景色の好い海岸に、祖母さんと二人居殘る事になりました。其後北海道では澤山な妹も生れ、弟も出來て、遠山さんが八つの時祖母さんの死と一緒に、父樣母さんの許に引とられましたけれど、久しく離れて住ったせいか、母子の仲の親さが薄くて、まゝしいなかでも斯うまではと思はれる程、始終冷く情けない思ひをしつゞけました。

『でもねえ、昨年父樣が惱充血で亡くなるまでは、まだ父樣が中に立ってて、いろ〳〵



よくして下すったんですけど、私の顏を見るのも嫌なんでせう、妹達は皆な函館の學校に通學させて、私ばっかりこんな遠い東京の寄宿舍なんぞに入れちまって、旅費が大變だから四五年歸らないで好いって云ふんですもの。どうせ私歸り度くはないけども、何でもが皆なさうなんてすから、考へると口惜しくって……』

『本當にねえ。』

愛さんはもう遠山さんが氣の毒で堪りません。意地の惡い、嫌な、ヒネクレた事ばっかり年中云ってて、好かない人だと思ったりしたことも濟まない氣がして、何とか云って上手に慰めてあげたいのですけれど、愛さんは一人娘で育って、父樣母さんの秘藏っ兒なものですから、どんな風なことを云って慰めて好いのか、それさへも解りませんでした。

『だけどもね遠山さん、あなた怒っちゃ嫌よ。母子ですもの、あなたの母さんだって、屹度お腹の底では可愛いと思ってらっしゃるに違ひないわ。』

『ホホホ、それぢゃ私がヒネクレるからいけないんだってあなたは云ふの。』

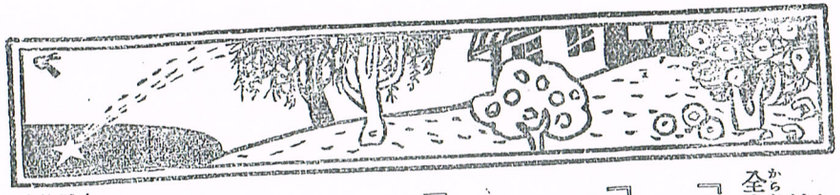
『アラ、左樣ばっかりぢゃないわ、だけどもあなた怒らないで頂戴、私の母さんだって私を叱るけども、皆な私のためを思ふからですって、憎いから叱る譯ぢゃないんだわ。』

『私の母さんも、せめて小言でも云って呉れるんだと何ですけども、私の事なんか叱っても呉れないんですもの、全くうっちゃり放しなんですもの、情ないわ。』

『……』

『愛さん、可哀相だって云って頂戴、あゝあ私は斯うして死んで行くのよ、一生母の愛も知らなで。』

『遠山さん惡いわ、そんなに氣を立てちゃ。』



遠山さんはすっかり昂奮し切って、わな〳〵全身をふるはせて居るのです。

『また餘りいろんな事考へて御病氣に障るといけないから、私歸ってよ。』

『嫌よ〳〵、ぢゃ學校の初まる時間まで居て頂戴、私何だかあなたに行かれると淋しくって……實の母さんにさへ憎まれた私、ね、可哀相だと思って、今暫く居て頂戴な。』

『そんなに云って下さるとどんなに私嬉しいか知れないわ、私ねえ、初めのうちあなたが些少も私なんぞお友達だと思っても下さらないらしいんでせう、悲しくなってよ、ですけども眞心さへ盡してれば、今に打とけて下さるだらうと思って』

『有り難うよ愛さん！』

愛さんが驚いて聲を立てようとした程急に遠山さんはいきなり愛さんの手を執って、自分の眼の上を覆うて、熱い熱い涙にひたしました。

愛さんも悲しくなって一緒に泣き入って居りますと、眞白な、見るからに氣持ちの好い服をつけた看護婦が、驗溫器をもって入って來ました。

『また昂奮してらっしゃるのね、いけませんのねえ。アノ只今先生が御回診なさいますから、一寸お熱を量って頂きます。』

遠山さんは自分で胸をひろげて、看護婦から受取った驗溫器を、脇にはさんだりする間も、矢張り眼をつぶったまゝ、瀧のやうに流れて出る涙で双頰を洗ふのでありました。

『若しかして死ぬんぢゃないか知ら、誰でも死ぬ前には頰先きが赤らんで、奇麗に見えるもんだって、……だって病人だと云ふのに、遠山さんは餘り奇麗すぎるんだもの……』

愛さんは遠山さんの顏を見入って居て、こんなにも思ひましたが、段々學校の初まる時間も迫って來ますし、院長だの醫員だのが入って來たのをきっかけに、そっと坐を外して病室から出て行きました。

と看護婦が廊下まであとを追って來て、餘り昂奮して病氣がつのるといけないから、どんなに病人が來て欲しいと望んでも、もう今日は面會しないやうに、又明日にでも見舞った方が好いと注意して行くのでした。

ですから愛さんは終日遠山さんの容態を氣にかけながら、其晩百合さんから病院へ來るやうに、さう云って使をよこした時も、母さんが夜ではあるし、看護婦の注意もありますから、明日まで遠慮する方がよからうと仰有ったお言葉を守って、無理に願って見舞はうとは考へませんでした。

だが其翌日、何も知らないで愛さんが病院へ行きますと、遠山さんはもう亡くなった後で、百合さんは眞赤に眼を泣きはらして居りました。

『百合さん、如何しませう……。』

『本當にねえ、遠山さんがあなたに逢ひ度がって、死ぬまで愛さん〳〵ってねえ、呼び續けてましたよ、そしてねえ愛さんのお蔭で、母さんも怨まないで死んで行けますってねえ。これまで知らなかった、眞心の尊さ有り難さも、愛さんから敎へられましたって。愛さん、遠山さんは散々苦勞に苦勞をしぬいて、それでも最後は平和におなくなりなすったんですもの。まあ〳〵せめてあきらめようぢゃありませんか。』

『さうね、苦しんだ後の平和！だけども悲しいわねえ。』

二人は又手を執り合って泣きました。

—完—